

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	宇宙と人生
Author(s)	吉田, 修夫
Citation	龍南會雜誌, 100: 66-75
Issue date	1903-06-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5680">http://hdl.handle.net/2298/5680</a>
Right	

## 宇宙と人生

六十六

在房州富浦 吉田修夫

吾が愛する龍南賢員君果して健在なりや小生は病軀を養ふて今房州の秀麗なる山海の靈氣に觸まつゝあり雜誌百號紀念發刊の通知に接し、病人の癡言を記さ連糸拙を願みず矣稿す、幸に病人の消息として御笑覧焉と、

宇宙と人生とは、父子有親の關係を有する實在なり。吾人若し唯心論的立脚地に立ちて、宇宙と人生とを觀想すれば、人生と離れて宇宙なく、宇宙を離れて人生なければんとの斷定に到達せん。是れ實在宇宙と人生とか因縁的不可離の關係にある實在なるか故なり、故に人生を解せんとせば、必ず宇宙の何たるかを解し、しか人生と如何なる關係にあるかを解せざる可からず。然らば宇宙とは何ぞ。

客觀のみを把有する自然と、主觀と客觀とを合せ把有する人生とを總合したるもの、之を宇宙といふ。之の宇宙は、具象と抽象即ち有限と無限、時間と空間とを抱容せる實在なり。具象的宇宙とは、現實界即ち吾人か肉眼を以て觀察し得る、具體的の人生と自然となり、即形而下的實在なり。抽象的宇宙とは、一切萬有に生々として活動せる勢力生命と之を統一せる根本活力をいふなり、即ち一切萬有の顯現力にして、形而上的實在なり。

現實せる自然と人生とは、其の根本活力、宇宙の精神生命の顯現したる現象なり、故に彼我の關係は本体と現象との關係に在りて存す。而して宇宙本体の生命は如何なるものなるや、古今の哲學者か與へたる解釋は、單に抽象的生命なり、形而上的生命なり、即ち精神的にのみ考察せられたるものなり、之れ其生命といへるもの、單に勢力として存在して、具體的に實見すること能はざるによ

も生じたる誤謬なりと信ず、即ち生命てふ概念に於て誤謬あるか故なりと信ず、吾人を以てすれば生命とは精神と形体との生活力なりと信ず、果して然らば、具象的抽象的の二面を包容せる宇宙の生命は、單に抽象的、形而上的生命といふを得ざるべし、然り。宇宙本体の生命は、之を分析すれば、二種の元素より成るを認識すべし。一は物質的生命(material life)にして、一は精神的生命(spiritual life or divine life)是なり。是等二種の生命か合一したものの之れ宇宙本体の生命なり。二者其一を欠きたる者とせば、吾人は一切萬有の解釋は不可能なりと信ずるものなり。何となれば天地萬有の實態を詳細に觀察すれば、一の現象にして二の現象と呈するものあればなり、即ち一個体にして、物質と精神の二方面を有するものあればなり。然り宇宙本体の生命は、其内容は二元素の合成しあるものなり。而して其一の生命の發動するは、二者同時に顯現せるものあり、或は一元素のみ顯現せるものあり、其發動の有様は、宛然、人間の心か智情意と發動するか如し、而して心か智情意を別にして考ふる能はざるか如く、宇宙本体の生命も、一元素を以て説明せられざるなり、然らば物質的生命とは何ぞや。

物質的生命とは、物質的顯現力にして、單に物質をのみ顯現するものなり。而して、其の物質の存在は、其の物質的生活力の活動によるものにして、精神的生活力と見るべきもの毫もあるなし、其のもの、生活生存は、單に本能的、機械的にして、無意識的なり、又た或物の如きは、全く無感覺的なり。固より、進化論的立脚地より鑽究すれば、或物にありては、幾分か意識的作用を有するものあれども、靈能より發動する意識にあらずして、尙ほ本能的範疇を脱せざるものなり。然れば通

有約に物質的生命の顯現物は、自我、自他の觀念意識なし。故に物質的生命の顯現は、主觀的作用をなす能はず、即ち宇宙と人生とに對して、主觀的たる能ざるものなり。其は單に客觀のみを把有する、宇宙と人生とに對して、客觀的實在なり。

自然は實に夫れなり。何となれば、自然は單に物質的生命の顯現にして、自我自他の觀念意識なく、只だ本能的機械的に活動存在するものなればなり。其か精神的生命を有する如き現象を呈し、原始民族及び原始的民族の宗教信仰の對象となり、天然崇拜の宗教を、宗教歴史に残したるは、宇宙本体の生命か賦與したる、宇宙を貫流し、宇宙に活動する原理によりて、そは機械的に活動したるものが、原始民族に、靈能的顯現と思意せられて、遂に人格化せらるゝに至りたる所以なり、敢て怪しむに足らず。自然に靈能なく、客觀のみを把有せるものなることは、今日の哲學者科學者か既に解釋せる如し。然らば精神的生命とは何ぞや。

精神的生命とは、物質的形体内に物質的現象ならざる、却つて其の物質的機關を主宰する精神活動の現象を起す、自由自在の靈能なり。唯物論者あり曰く、精神的現象の顯するは、別に精神なる靈能の物質以外に存するにあらずして、物質的生活力の活動したるものなりと、然れども、之は偶像的信仰を有する宗教者の如く、具体以上に何物をも思索し、認識すること能ざる一種の科學者にして、また深く責むるに足らず。夫れ、葡萄の樹より無花果の實を得、無花果の樹より葡萄の實を得ることを能はざるは、不可動の眞理原則なることは人の知る所也。物質的生活力は物質的生活、物質的活動及存在を維持するに過ぎず。精神的活動及現象は、斷じて獨り精神的生命即靈能によるなり。

斯の如きものにありては、一個体を有して、一個性(Personenheit)を存す、即ち物質と精神とによりて、一個体として實在す。其は實に本能以外意識的作用によりて生活するものにして、自己及び自他の觀念意識を有す。其意識的活動たるや、實に其精神でふ靈能によるものなり。其靈能は實に意識を支配する意識の源泉なり。之れ其靈能か或意味に於て、絶對力を有する宇宙的生命たる所以なり。實に之の個性(Personality)は宇宙本体の精神的生命に所縁する所のものなり。かゝる實在物は、宇宙と人生とに對して、主觀的たると同時に客觀的たるものなり、即ち其れ自身にして主觀と客觀との實在たるものなり。

人生は即ち之れなり。何となをば、人生は物質と靈能とによりて、一個体をあし、意識的作用をなし、其の物質は宇宙と自然とより見て、客觀的實在なると同時に、其靈能は自己の物質的部分と自然と宇宙とに對して主觀的作用をなすものにて、夫れ自身にて、同時に客觀的主觀的なればなり。之れ實に人類か小宇宙(Microcosm)と稱せらるゝ所以なり。何となれば大宇宙(Cosmos)が主觀的たると同時に、客觀的實在にして、人生と宇宙との關係が、人生なる主觀が、宇宙に對して主觀たると同時に客觀たる宇宙の主觀が人生よりして客觀たる關係にあるか故に、然か哲學者か稱したる所なり。論議し來れば、斷定は自明也。即ち人生は、宇宙本体の生命なる物質的生命以外、精神的生命を抱有す、換言すれば、人生は動物的生命(animal life)にして狹義のmaterial lifeの謂なり)の顯現たると同時に精神的生命即宇宙の大精神の顯現なり。之れ實に人類が靈的動物として、万有一切現象の絶頂に位せる實在たる所以にして、吠陀の神話的宗教時代の末葉に於て、萬有神祕唯心論の最高潮と

唱へられて、ウバニシヤド哲學に於けるブラハマの觀念の先驅をなせし思想即神は天地一切の網羅の網羅即中心自己なりと觀想せしは、予か論究したる眞理を或る方面より髣髴として觀じたるものなり。故に宇宙と人生とは、其の内容實質に於て一にして、父子有親の因縁的關係にありといふ可し。

人生が斯る尊嚴なる、崇高なる清明なる、生々潑々たる豊富なる宇宙的生命を、其の内容客に於て有するか故に、彼一度び、人生と自然との親和契合、包擁融和の妙境に入りて、人生と自然とを解釋するや、彼は忽然として宇宙の知識(welt kenntnis)を得るに至る、宇宙の知識とは、神人合一の妙境、靈活的實有世界の感得にして、人この妙境を感得し、この靈域に到達あれば、即ち其處に宇宙の情緒(weltgefühl)を發動し來りて、こゝに宇宙知識は、宇宙情感を照らし指導し、宇宙情感は、宇宙知識を鼓舞して、遂に絶妙宏大なる雄靈の宇宙意見(welt wille)を惹起し、一大精靈の活動を現じ、絶對無限、光明無量、自由自在の靈界に向ふて、永遠の活動を試み、宇宙の實相を身に体现せんことを、希求して、宇宙の生命即ち宇宙の實體眞如に合致せんことを憧憬し、遂に實體に觸れて、其宇宙の生命を感受して、宇宙的生命を發揮し、宇宙と共に永遠の生命に入る。

永遠の生命とは、即ち宇宙に溢ふる、理想的生命の大潮流に投じて、永遠に活動する神的生命(divine life)なり。既に之の神的生命を感得するものは即ち不死の人、解脱の人、神靈の子たるなり。之の妙趣に至らば、早や現實的人格にあらずして、地上にありて、現實以上即ち實有界の人格たり。全く差別界を超脱して、宇宙と彼との間に、何等の絶縁的隔離的發感を有せず、茲に於て彼は、

宇宙的活動を現するに至るものなり。神人合一、即身成佛とは、實に之の靈境妙趣に生活する自體を有するものの意識の表明なり。神人合一、即身成佛の意識とは何ぞや、夫は宇宙の生命 (Welt-  
Leben) なる、哲學的に言へば、實體或は眞如、宗教的に言へば、神或は佛と人間生命とか親和契合したる一乗如々の入實有の自覺をいふ。トルストイの所謂 *His life is united to the life of the God* 即神我 (divine-self) に合致したる意識をいふ。而して之の眞理は、單に架空的理想に止まるべきものなるや、果た實現さるべきものなるや、果然實現せらるるものなり、靈妙なる尊嚴なる人間の歴史は、確かに之を証明す。原始時代より、現代に發展せる歴史を、宗教的に觀察すれば、宗教の基礎として顯現したる三種の人生觀あるを見る。而して歴史の發展と共に漸次に發展したるものなり、三種の人生觀とは第一、個人的即動物的、第二、社會的即偶像的第三、宇宙的即神靈的なり。

第一、個人的動物的人生觀とは、人間の生命は、唯だ彼自身の個人性にして、其生命の目的は、其欲望を満足せしむるにあり。

第二、社會的偶像的人生觀とは、人間の生命は、單に彼自身の個人性のみにあらずして、家族、種族、乃至國家の如き、多數の個人性の總合又は連續にして、其生命の目的は、社會の意志を満足するものなりといふにあり。

第三、宇宙的神靈的人生觀とは、其の人間の生命は、其の個人性又は個人の集合に限りたるものに非ずして、總て生命の永遠不朽の源泉即神、實體其のものに於て、其生命の意義を見出して、其の目的たるや、其個人の欲望を滿たし、社會の意志を満足せしむるに非ずして、其生命の眞相に到達

するにあり、其の生命の源泉即實在に合致するに在るものなり。トバネストイ翁は更に委しく之を説明して曰く。

Firstly, the savage sees life through the medium of his own desires: He calls for nothing but himself, and for him the highest good is the full satisfaction of his own passions. The incentive of his life is personal enjoyment. His religion consists of attempts to propitiate the gods in his favor, and of the worship of imaginary deities who exist only for their own personal ends.

Secondly A member of the pagan world recognises life as something concerning other besides himself; he sees it as concerning an aggregate of individuals, — the family, the race, the nation, the state, and is ready to sacrifice himself for the aggregate. The incentive of his life is glory. His religion consists in honoring the chiefs of his race, his progenitor, his ancestors his sovereigns, and in the worship of those gods who are the exclusive patrons of his family, his tribe his race and his state.

Thirdly, The man who possesses the divine life-conception neither looks upon life as centered in his own personality nor in that of mankind at large, whether family, tribe, race, nation, or state; but rather does he conceive of it as taking its rise in the eternal life of God and to fulfil His will he is ready to sacrifice his Personal, family, and social well-being. Love



the impelling motive of his life, and religion is the worship in spirit and in truth of the Father (beginning of all things, — of God himself).

翁の説明は、實に人間思想の發展を論じて劃切なり、正當なりといふべし。唯に歴史が、之の個人の動物的人生觀より社會的に、社會的より宇宙的神的に發展せる漸進的變遷を証明するのみならず、一個人の一生に於て、之の歴史的發展の現象を實見又は實驗するものなり。見よ其初めに於ては、單に動物的生命をのみ認め、之が欲求を満足せんとするに止まれども、稍々思想發展するや、己の自己阿なるに満足せず、自他の關係と知らず、自己を以て、社會精神の一顯現(狹義)と認め、社會の意志を満足せしむる以て、無上の満足となして、名譽と渴仰する時代なり然れども遂に之に満足せず、一度宇宙の實相を觀想して、一種の靈活と觸るゝや、何等の緣故なかりし、宇宙は彼と密接の關係を生じ、彼の生命と宇宙の生命とは、所縁所生の關係にあるを觀じ、遂に宇宙知識宇宙情緒宇宙意志と發起して、宇宙的生命に合致する所の人格なるに至るものあるを見る。即ち吾人は此を宇宙的人格、宗教的大天才、基督と釋迦に於て明かに之を實驗する也。

基督は我と神とは一なり。我を見し者は神を見しものなりと叫びて、萬有神教の「神教の開祖」として顯現せり。釋迦は天上天下唯我獨尊と呼びて、ウエダンタ哲學ウパニシャド哲學を大成して、萬有神教の開祖として顯現せり。「我と神とは一なり」「我を見しものは神を見しものなり」「天主天主唯我獨尊」とは共に是れ動物社會的生命と脱却して、宇宙の生命に合致したる、眞如實體神我に合致したる意識の發聲にあらずや。空前の宇宙的梵榮宇宙の福音にあらずや。基督を理想化せしめ

神と觀崇せんかために、三位一体の獨斷哲學的を構成し、釋迦を理想化して、化身佛と觀崇せんかために、一佛二身の獨斷的哲學を構成したるは、固より今日の哲學思想を以て、論ずる時は誤想なり。雖も、又宇宙と人生との關係を明確にし、人間の生命は宇宙の精神と父子有親的に相合致するを得るの證秘なり。此は打消すべからざる史上の事實にして、更に疑を入るべき餘地なけん。人間か之の靈境妙趣に到達するは、前述せし如く宇宙の精神と人間の精神と本体と現象即父子的關係に於てあるか故なり。論者或は曰はん、本体と現象とは別なりと、之は其内容實相を觀想せざる皮想的觀察 偏據するか故なり。所生の現象か、何故に所縁の實在と一ならざるか、完全結果は其原因と一なりとは正確なる論理なり。本体と現象とは一にして現象は實在なり。宇宙の生命の顯現たる人生は、宇宙と父子有親にありといふは決して誤謬の觀想にあらずと信ず。

宇宙生命即神我は、人間生命の遂に到達すべき極致線より。例へ唯永遠に於て其の標的に到達すべきものなりとするも、人間の生命は、永久に其の極致線 向つて、接吻抱合せんかために、絶えず渴仰憧憬し、之に到達せざれば止まず。天賦の生命を有す。之の極致線は、固より、現當に於て、吾人人類の理想たり、然れども之の理想は空漠たる、偶然的の又人間の靈妙なる發明的のものにあらずして、實に人間各個人の心靈 把住する實在せる或者なり。而して人間をして活動すべく感激せしむべき、完全永久の理想にして、之の理想は實に人生を以て宇宙的生命を體現し神我即完全我 (perfect self) に合致せしむるものなり。

既述の如く、宇宙の生命は、其内容は物質的生命と精神的生命の如く、人間の生命は、單に其内に

ある動物的要素、物質的生命のみならず、又た宇宙の生命によつて指導せらるる精神的生命のみ  
にあらすして、實に宇宙の生命即神の意志に合致する動物的生命と精神的生命との合成にして、之  
の二者の合成の生命は、神の生命に觸接する毎に、層一層生命を發揮するものなり。即ち之のヒュ  
マニタリイフは永遠の活動となして、神の如き完全即神我に向つて、憧憬進歩する状態、實質のものな  
り。何物にも服従せざる自在力あるものにして、神的生命、宇宙的生命に至るものなり。宇宙と人  
生とは、實に父子的關係のものなる事を自覺し、意識するに至るものなり。最早吾人は宇宙と人生  
との關係につき、論明して、稍々盡したる事を信ず。然れば是にトルストイ翁の明確なる卓拔な  
る穩健なる識見を引証して、之の論を終らんと欲す。曰く

The principle restores to man his original consciousness of self, not the animal self, but  
the God-like self; the spark of divinity as the son of God, like unto the Father, but  
clothed in a human form.